

121 欠けたところをさらに美しくー金継ぎ (2022年7月21日)

最近、日本大使館に、金継ぎができる職人を紹介して欲しいというお問い合わせをいただくことがあります。一昨年、パリにある装飾芸術美術館で開催された展覧会で、金継ぎが施された茶碗が展示されました(※)。金継ぎは、フランスではまだあまり知られていないことから、展覧会で紹介されたと考えていましたが、一般の方に金継ぎという言葉が知られていることに驚きました。調べてみると、フランスで金継ぎのワークショップが頻繁に開催されていることがわかりました。そこで、今回は金継ぎをご紹介します。

「金継ぎ」とは、ヒビが入ったり、一部が欠けてしまった陶磁器の破損部分を漆で接着し、金粉を施す修復技法のことです。「金継ぎ」と言いますが、金は装飾に過ぎず、実際に陶磁器を接着しているのは漆です。金継ぎをすると、破損前の形に戻るだけでなく、接着した部分は金が施された装飾となり、新たな美しさが生まれます。破損した部分が分からなくなるように修復するヨーロッパとは、全く考え方が異なる修復方法です。



フランスでは、陶芸作家で金継ぎを行っている方がいらっしゃいます。陶芸作品の装飾技法の一つとして金継ぎが用いられるようになり、その美しさがフランスで広く知られるようになったのではないかと考えられます。しかし、金継ぎは、漆の接着効果を用いた修復技法ですので、本来は陶芸のための技法ではなく漆芸(漆を使った技法)の一つなのです。



漆を接着剤として使った修復は、約9000年前の縄文時代の土器にも見られます。室町時代(14-16世紀)に茶道の発展とともに、金粉を使った金継ぎが広く行われるようになりました。当時の茶の湯では、現在の中国や朝鮮半島から作られた茶碗が珍重されていました。それらの茶碗は大変貴重なものでしたので、当時の人たちは、茶碗が欠けると、修理して再び使いたいと考えました。日本のもったいない精神が表れています。当時は、蒔絵など漆を使った工芸品の技術が普

漆を接着剤として使った修復は、約9000年前の縄文時代の土器にも見られます。室町時代(14-16世紀)に茶道の発展とともに、金粉を使った金継ぎが広く行われるようになりました。当時の茶の湯では、現在の中国や朝鮮半島から作られた茶碗が珍重されていました。それらの茶碗は大変貴重なものでしたので、当時の人たちは、茶碗が欠けると、修理して再び使いたいと考えました。日本のもったいない精神が表れています。当時は、蒔絵など漆を使った工芸品の技術が普

## パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

及していました。さらに、茶の湯では、均一ではなく、完璧でもなく、ゆがみや傷があったとしても、ありのままの姿を受け入れる考えがありました。このような時代背景があったことから、破損した部分を隠すのではなく、敢えて目立たせて芸術性を高めた金継ぎが広く用いられるようになったと考えられます。日本でも、著名な陶芸作家の作品の中には、後世に金継ぎで修復されて美術館に収められているものがあります。



野々村仁清作 錆絵山水図水指 17世紀  
(20世紀前半に六角紫水によって修復)  
Pot à eau fait par NONOMURA Ninsei au 17e,  
restauré par ROKKAKU Shisui au 20e  
出典 : ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

実は、日本でも金継ぎはちょっとしたブームになっています。手間暇をかけて修復することは、物を大切にしたいという思いを表すもので、現代の大量消費社会を見直す動きに合致しています。また、自宅で簡単に金継ぎができるキットが販売され、コロナ禍によっておうち時間が増えたことで、金継ぎを楽しむ人が増えました。日本人とフランス人が、「金継ぎ (Kintsugi)」という言葉だけではなく、愛着のあるものを長く大切に使う心も共有していくことができたら、嬉しく思います。

#### 4 装飾芸術美術館「Luxes」展

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100158242.pdf>